

# 活動報告

## カザフスタンとの教育・学術交流

教育学域のカザフ国立教育大学の交流は2016年後半にはさらなる進展を遂げ、共同研究プロジェクトの実施に至った。本プロジェクトは、グローバル・イシューであるカザフスタンとウズベキスタンにまたがるアラル海消滅危機の問題につき、カザフ国立教育大学と共同調査研究を組織し、諸問題の解明に取り組もうとするものである。プロジェクトの契機となったのは、2016年3月15日～19日に行われた教育学専攻関連の教員5名（教育学域代表・井田仁康教授、藤田晃之教授、樋口直宏教授、嶺井明子教授、タスタンベコワ・クアニシ助教）と院生3名（教育学専攻・村田翔吾、橋田慈子、学校教育学専攻・細矢智寛）によるカザフ国立教育大学の訪問の際に同大学理科・自然科学学部の Zhanbekov Khairulla 学部長と ESD と国際理解教育の観点からアラル海の問題に関する共同研究の可能性について意見交換である。

プロジェクトの第一段階として、2016年9月9日～17日に筑波大学の教員（教育学域代表・井田仁康教授、タスタンベコワ・クアニシ助教）と院生（学校教育学専攻・細矢智寛、教育学専攻・カキモフ・バザルハン）チームおよび日本の他大学の地理教育の専門家4名のチームがカザフ国立教育大学の Zhanbekov Khairulla 教授と院生（自然科学教育専攻・Tolegen Aigerim）、高校生（ナザルバエフ知的学校2年生・Idrissova Aizhan）チームと共同体制でアラル海の現地調査を行った。調査ではアラル海が位置するクズルオルダ州アラル群の教育局の関係者にアラル海問題に関する教育活動についてインタビュー調査を行い、また、アラリスク市第83番初等中等教育学校、アラル海周辺のカラテレン村第82番初等中等教育学校を訪問し、教員と児童生徒との交流を通してアラル海および世界の環境問題の知識に関するヒアリングを行った。

今回の調査を通して、アラル海周辺の地域住

民と学校教育関係者ら、児童生徒のアラル海問題への関心が高く、植林活動等に積極的に関わり、環境改善に努めていることが分かった。プロジェクトの次の段階として2017年6月3日～4日に筑波大学で開催される第27回日本国際理解教育学会大会の公開シンポジウムにおいてアラル海問題と日本の湖水問題を国際理解教育の一環として検討する機会を設定して、カザフスタン側と日本側の学校教員たちの交流を実現させることである。

（文責：タスタンベコワ・クアニシ、井田仁康）



写真1

干上がったアラル海海底の塩水晶を指す井田学域代表

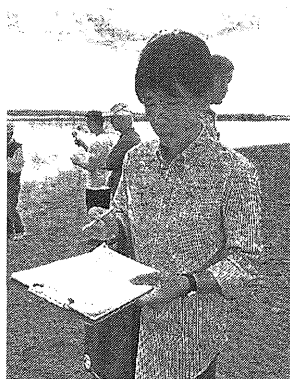


写真2

アラル海水質検査の記録を取る  
学校教育学専攻2年次の細矢智寛さん

## 中国・華東師範大学、北京師範大学との交流報告

人間総合科学研究科に属する人間系専攻群では、平成25年度より中国の優れた大学、とりわけ師範系大学との学術交流を一層進めるために、教員・大学院生の派遣を行ってきた。またその取り組みにおいては、将来に向けて教育学界をけん引できる優秀な研究者養成という使命を果たすべく、ダブルディグリー制度を視野に入れた大学院生間の交流についての協議や、中国人留学生の受け入れのための大学院説明会を併せて実施している。

本年度は、10月30日～11月3日の日程で、華東師範大学と北京師範大学を訪問した。教育関連3専攻1分野からは浜田博文、甲斐雄一郎、上田孝典の3名が参加した。

10月31日には、華東師範大学閔行キャンパスにて外語学院日語系の学生を対象に専攻説明会を実施し、約30名の参加者を得た。終了後には、日語系主任潘世聖教授と次期主任に内定している尹松教授と懇談した。潘主任は、昨年度の3月に筑波大学を訪問されたメンバーでもあり、中国での再会となった。また中国を代表する嘉納治五郎研究者として著名であり、和やかな交流を行うことができた。

11月1日の午前には、教育学部から学部長の袁振国教授、呉遵民教授、楊福義副教授等と面会をした。その主な目的は、華東師範大学との交流をさらに進めるための協議である。教育学専攻では、来年度から東北師範大学との間でダブルディグリー制度を開始することになっているため、そのプログラムをモデルとしながら、華東師範大学との実質的な制度構築についての話し合いがもたれた。とくに華東師範大学からは、日本語ができない学生でも英語で授業が受けられるプログラム（授業）の開設要請や、またジョイントディグリーなどの案も出された。今後も継続的に協議を前進させるために、学術交流を深めていく機会を増やすことで合意し、2017

年3月に華東師範大学の教員と大学院生を筑波大学に招待することにした。午後には、全学対象の大学院留学説明会を行った。

夜、北京に移動して翌2日に、北京師範大学教育学部において、大学院説明会を行った。約20名の参加者があったものの、外国語文学学院日語系の学生には情報が伝達されていなかったなど課題もあった。

説明会の後、教育管理学院院長鮑傳友教授、比較教育学研究センター姜英敏副教授、国際交流室武海濤主任らと面会をした。将来的に共同学位プログラムを開設することを前提に、継続的に交流を進めていくことを確認した。姜副教授は、所属する比較教育学センターの学生には筑波大学への留学を希望する学生もいるが、交換留学制度が整っていないとの指摘があり、大学間協定だけでなく部局間協定の締結など、今後に向けた生産的な議論ができた。

以上が、今年度の訪問に係る概要である。平成25年から、これまでに積み重ねられた成果が開花していく手ごたえを感じられた訪問となったように思う。先に触れたように、東北師範大学ではダブルディグリー制度が実現された。今後は、華東師範大学、北京師範大学とも信頼関係に依る交流の深化が期待される。

また大学院説明会では、筑波大学に対する中国人学生の関心の高さを感じることができる。すでに両大学からの留学生受け入れ実績も出始め、平成29年度から留学を希望する申し出もあった。また日本語専攻だけでなく、教育学を専門にしながらも独学で日本語を学んだ学生も見られるようになってきた。こうした留学生が筑波大学で学び、今後の日中学術交流の懸け橋となっていくのであれば、今、蒞かれている種を長期的な展望の下で着実に継続的に育てていく努力が、私たちに求められているように思う。

(文責：上田孝典)

## 中国・東北師範大学との交流報告

人間総合科学研究科の教育学関連の博士前期・後期課程専攻・分野および教育学類では、東北師範大学との教育研究交流を継続的に行ってきた。とくに博士前期課程教育学専攻としては、大学院教育のグローバル化の一環として東北師範大学の思想政治教育研究センター、教育学部、文學院の3つの大学院の修士課程との間でダブルディグリープログラムを開設すべく準備を進めた。そして、ようやく2016年11月21日に中国長春市にある東北師範大学において、その協定締結の調印式が行われるに至った。

今回は、人間学群国際化プロジェクトの一環として吉田武男学群長を団長に、綾部早穂心理学類長、障害科学域の森地徹助教と人間学群学生9名とともに、浜田教育学専攻長及び学校教育学専攻院生の那楽氏、教育学専攻院生の宮本慧氏の、合計15名が現地を訪問し、多くの学生及び教員と交流する機会を得た。

11月20日に成田空港を出発し、北京空港で国内線に乗り継いでその日の夜には長春空港に到着する予定だったが、北京空港で乗り継ぎ予定の飛行機に乗り遅れるというハプニングに見舞われた。翌日午前中に予定されていた調印式に間に合わないのではないかと危惧されたが、那楽氏の迅速で的確な交渉・アレンジにより、急遽、大連行き便に予定変更して夜中に大連空港に到着し、空港近くのホテルに宿泊した。

11月21日は、早朝5時にホテルを出発して6時台の高速鉄道で長春へ向かった。そして、なんとか午前中のうちに東北師範大学にたどり着くことができた。学生引率教員という立場では、ハラハラ、ドキドキであったが、派遣された学生たちにとっては、予定外の中国新幹線に乗車することができ、エキサイティングな異国体験となった。到着後は、全員で東北師範大学の楊曉慧党委書記及び劉益春学長を表敬訪問し、その後、予定時刻よりも少し遅れたものの、鄔志

輝・東北師範大学大学院院長と浜田との間で協定の調印を滞りなく済ませることができた。調印式終了後は、院生・教員との交流会が開催された。思想政治教育研究センター、教育学部、文學院の院生による日本語のプレゼンテーションと、宮本慧氏による英語のプレゼンテーションで、それぞれの大学院の様子が紹介された。

11月22日は、東北師範大学の附属幼稚園、附属小学校を訪問して授業の様子を参観した。また、東北師範大学内に設置されている日本国留学生予備学校を訪問したほか、文學院で日本語を専攻する院生との交流会も開催された。11月23日は予定通り、北京経由で羽田空港に到着した。短い滞在ではあったが、内容は盛りだくさんで、学生と教員が濃密な交流をおこなうことができた。

